



特集

21世紀に求められる 外国語教育

コミュニケーション力は、21世紀の多言語多文化のグローバル社会で生きていくために必要な力の一つです。外国語教育においてもコミュニケーション力の養成が重視され、その傾向はますます強くなっています。コミュニケーション力を育てるために、どのような方法が効果的なのか、外国語教育の内容と方法を改めて考えることが必要です。

さらに21世紀に必要な力として、コミュニケーション力に加え、情報・メディア・ITリテラシー、思考力、問題解決能力、協働力なども求められるでしょう。こういった力の養成も外国語教育で目標にすべきであり、外国語教育はそれらの力の育成に貢献することができると思います。

今号は、TJFが昨年度より開催している高校の外国語教師を対象とする研修の内容から、特にコミュニケーション志向の外国語教育に焦点をあてて、新たな外国語教育のあり方を問いたいと思います。



特集 p.1

21世紀に求められる外国語教育

人間的成長を促す外国語教育の模索
外国語教育のゴールを達成するために
パラダイムシフトを受け止めて

シリーズ p.10

Close up! TJFウェブサイト ⑧

互いのことばと文化を学び、交流を促進する場づくり

TJFニュース p.12

メナーシャ市との今後の連携に向けて
北米出張レポート
参加者それぞれに大きな収穫 ほか

お知らせ p.16

人間的成長を促す 外国語教育の模索

TJFは、外国語教育の目標は文法や語彙を覚えることだけではなく、学習した言語を使ってその話者とコミュニケーションすること、そして言語と不可分の文化に焦点をあて文化理解を深めることにあると考えてきました。それによって、外国語学習はより実感を伴ったものとなり、学習者はさまざまな文化的・社会的背景をもつ人びととの対話を深め、世界観や視野を広げることができると思うからです。これは、自己の確立と、ことばや文化の背景が異なる人びととつきあっていく力の育成にもつながっていきます。

現在はさらに外国語教育の目標として、言語運用(狭義のコミュニケーション)と文化理解に加えて、21世紀に必須とされるさまざまなスキルや能力(コンピテンシー)の養成もしっかり位置づける必要があると考えるようになりました。これはOECDをはじめ各国で要請されている力でもあります。そして最終的には、学習者が教室内ではなく、現実社会のなかで学習した言語で同世代と交流できるようになることが小中高校の外国語教育にとって重要だと考えています。21世紀において外国語教育が果たす役割は想像以上に大きいのです。

新しい外国語教育へ

TJFは、高校における中国語教育と韓国語教育の指針となる「高校の中国語と韓国語の学習のめやす」★注(以下、「学習のめやす」)の開発に2006年から取り組んでいます。「学習のめやす」では、前述した「言語運用」と「文化理解」「21世紀に必要な力」の3領域を視野に入れた総合的コミュニケーション能力の育成をめざしています。2007年に試行版を発行した後、全国の高校の中国語・韓国語教師や専門家の意見を踏まえて完成版の作成作業を進めるとともに、「学習のめやす」を全国の教師と共有するために、2009年夏から教師研修を実施しています。

「学習のめやす」の開発と教師研修の実施にあたって、TJFがこれまで英語圏の小中高校向けの日本語教材やカリキュラムの開発に取り組む過程で蓄積した、当該地域における先進的な外国語教育の知見を還元するとともに、各国の日本語教師や専門家とのネットワークを活用したいと考えました。そのなかで、米国の日本語教育において指導的立場にあり、教

育指針である外国語ナショナル・スタンダードの「日本語」執筆者の一人である當作靖彦氏(UCサンディエゴ校教授)に、「学習のめやす」の開発と教師研修から成るプロジェクト全体の監修を依頼しました。

2010年開催の「学習のめやす」に準拠した教師研修における當作氏の講義の前半では、コミュニケーション中心の外国語教育の目標、内容、方法が、後半では、それに加え文化および21世紀に必要なスキルを包含した新たな外国語教育のあり方が提示されました。本特集では、講義の前半を中心に取り上げます。

後半で扱われた、外国語学習における言語と文化の融合、そして21世紀に必要なスキルの導入を含む「学習のめやす」の詳細については、今後、本誌で紹介する予定です。

★注:文部科学省の高等学校の学習指導要領の「外国語」教科で科目として取り上げられているのは英語のみで、その他の外国語科目は英語に準じるとして具体的な記述はない。中国語・韓国語の場合、高校からの履修がほとんどであり、単位数も2~4単位である。「学習のめやす」は、学習指導要領の外国語教科の目標に沿いながら現在の教育状況を踏まえ、高校の中国語・韓国語教育の目標、内容、方法を示すことをめざしている。



外国語教育のゴールを達成するために

當作靖彦(とうさく・やすひこ)

カリフォルニア大学サンディエゴ校教授 (Ph. D.)、外国語プログラムディレクター。専門は第二言語習得理論と外国語教授法。アメリカの日本語ナショナル・スタンダーズの作成に参加、現在、外国語ナショナル・スタンダーズ理事会日本語代表理事。外国語教育ロビー団体 Joint National Committee on Languages 日本語代表。Association of Teachers of Japanese 前会長。



外国語教育のゴールは何か

言語の果たす主要な機能の一つは「コミュニケーション」である。われわれは他人とコミュニケーションし、自分の意思を伝えたり、他人の意見を聞いたりする。また、書かれたもの

とコミュニケーションすることにより、新しい情報を得たり、自分自身の考えを形成したりする。

外国語教育のゴールとは、このようなコミュニケーションができる学習者をつくることである。

コミュニケーション能力はどのように獲得されるのか

コミュニケーション能力を身につけさせることが大切だといわれて久しいが、そのための活動が教室で行われているだろうか。いまだに文法・語彙の習得が最終ゴールになっている。文法積み上げ・教科書中心の授業が行われていたりすることが多いのではないだろうか。外国語教育において文法・語彙を習得することは重要ではあるが、それだけでは言語を使ってコミュニケーションができるようにはならない。

では、コミュニケーションができるようになる外国語教育とはどのようなものだろうか。

日本で文法中心の英語教育を受けた私は、アメリカに来たとき、コミュニケーションができず苦勞した。結局、英語でコミュニケーションができるようになったのは、現実生活での必要性から、英語を使ってコミュニケーションをすることを通じてであった。つまり、**コミュニケーション能力は、真のコミュニケーションを通じて一番効果的に獲得されるのである。**

なるほど!
文法・語彙の習得は
最終ゴールではないんだ!

真のコミュニケーションとは何か

現実生活でのコミュニケーションでは、コミュニケーションを行うことが必要な状況があり、相手(目前にいない相手も含めて)が存在し、コミュニケーションを行う理由と内容がある。そして、どのようにしたら自分の意思をうまく伝えられるかという方法を考え、コミュニケーションの結果が期待される。**コミュニケーションが必要な状況、相手、理由、内容、方法、結果という条件がそろって初めて真のコミュニケーションといえる。**

の習得という名のもとに、そのような不自然な会話が行われていることが多い。真のコミュニケーションが行われていないのである。

1996年にアメリカで発表された、21世紀の新しい外国語教育の指針を示す「ナショナル・スタンダーズ」では、コミュニケーションを次の三つのモードで定義している。

- ① 対人的コミュニケーション：口頭／書面で双方向のやりとりをする
- ② 解釈的コミュニケーション：聞く／読むことを通じて情報を得て、意味を解釈する
- ③ 提示的コミュニケーション：自分の考えなどを口頭／書面で発表／提示する

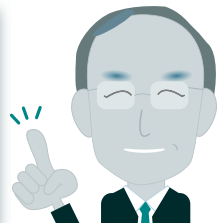
そして外国語のクラスではこの三つのコミュニケーションがバランスよくできるように教える必要があるとしている。

実際にコミュニケーションができるような学習者をつくるためには、**教室内で現実あるいは現実に近いコミュニケーションの場をつくる必要がある。**

会話練習 ≠ コミュニケーション
なのか!

しかし、現在の外国語のクラスでこのようなコミュニケーション活動が行われているだろうか。数詞や数を教えるために、学習者に3本の鉛筆を見せ、「鉛筆は何本ありますか」という質問をし、「鉛筆は3本あります」という答えを要求するのは真のコミュニケーションの練習といえるだろうか。3本の鉛筆があることがお互いに理解されている状況では、そのような会話は現実には成立しないものである。しかし、**外国語**

コミュニケーション能力を養成する授業の作り方



これがポイントですよ★

ここに挙げた活動例の設定は一部抜粋です。活動例の全容はウェブをご覧ください。

☞ www.tjf.or.jp/newsletter/backissueslist_jp_120.htm

STAGE 1 明確なゴールを設定する

教科書を1冊終えることがゴールだと思ってた!



● 年間授業計画や単元などが終わった時点で、学習者がどのレベルで、どんな話題で、どんなコミュニケーションができるようになっていくか、というゴール(目標)を最初に設定する。このとき、can-do statements / 能力記述文(〜できる)を用いる。

● ゴールをまず設定し、ゴールを達成したことを測る効果的なテストをつくり、そのテストでいい成績をとれるようにするための授業の内容や方法を考えて授業を設計する方法を「バックワードデザイン」という。

外国語としての日本語の授業設計の事例

単元のゴール(例)

レベル: 日常生活の簡単なコミュニケーションを、表現や語彙に間違いはあっても外国人に慣れた相手となら行える。

話題分野: 自分と身近な人びと

話題: 自己紹介

can-do: 自分のことについて簡単に紹介ができるようになる。

以下紹介するのは、上記の単元の一部としての授業(学習活動)の例
can-do: 自分の趣味やできることについて簡単な紹介ができる。

STAGE 2 評価(テスト)をつくる

えっ!?
教える前にテストをつくるの!?



● ゴールを達成できたかどうかをどのように測ったらいいかを考える。実際に教えた後にテストをつくるのではなく、教える前にテストをつくる。

● テストというと、紙のテストを考えがちであるが、授業のめざすものが、コミュニケーション能力の賦与であるならば、パフォーマンスをさせて評価するようなテストが多用されるべきである。また、常に教師が評価するのではなく学習者にも自己評価させたり、また個人だけではなくグループ活動を評価したりすることも重要である。

☞ **評価活動(テスト):** ロールプレイカードに書かれている情報をもとに、自分の趣味やできることについて紹介するロールプレイを行う。

☞ **評価の基準:** 自己紹介の内容、わかりやすさ、語彙の正確さ、語彙の多様性、文法の正確さ、文法の多様性、ジェスチャーの使い方など。

STAGE 3 教える内容を考える

学習者によって必要な語彙も違うよね。

● STAGE 2のテストで学習者がいい成績をとれるようにするためには、何を教えずにはならないかを考える。学習者の興味、ニーズ、能力に応じて教える内容を選ぶ。

☞ **趣味についての紹介に必要な語彙を選ぶ。**
⇒ ジョギング、ビデオゲーム、マンガ、将棋、グルメ、野球、書道、アニメ、音楽鑑賞、ヨガ、絵画、カラオケ……など。

☞ **趣味の説明に使う表現・文法を選ぶ。**
⇒ ～です、～が好きです/得意です、などのなかから、例えば、可能形「れる・られる」を選ぶ。

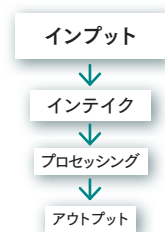
STAGE 4 教える方法を考える

効果的なプロセスで教えているかな……?

● どのように教えたら、コミュニケーション能力の養成につながるかを考える。その際、私たちが**外国語を習得していくプロセス(第二言語習得過程)**を踏まえる。

● 外国語を習得するということは基本的に形式と意味の関係を理解し、正しい関係を強固にすることである。新しい形式(語彙、表現・文法)をインプットとして与え、その意味を理解させることが第一歩である。インプットを大量に与え、形式を正しい意味と結びつけ、関係が明確になったら、実際に形式をコンテキスト(その語彙や表現が使

第二言語習得過程



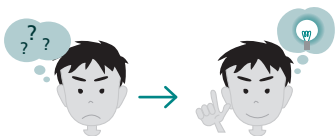
語彙の習得活動をつくる

STEP 1 導入

STEP 2 インプット活動



STEP 3 ことばで遊ぶ活動



STEP 4 アウトプット活動



文法・表現の習得活動をつくる

STEP 1 導入

(=語彙の習得活動のSTEP 5と位置づけることもできる)

STEP 2 インプット活動

STEP 3 アウトプット活動①

(コンテキスト内でのメカニカル活動)

われる状況)のなかでアウトプットさせ、形式と意味の関係を確認するとともに、関係を強固なものにする。これにより効果的な第二言語習得が進む。

- 語彙も文法もコンテキスト(文脈・意味)のなかで教えることが大切である。絵、写真、レリア、ジェスチャーなどを使ってコンテキストをつくるのが教師の仕事の一つである。【活動例1】

- 耳や目からのインプットをたくさん与える。言わせたり書かせたりしてアウトプットさせる必要はない。【活動例2】

- ことばを言わせたり、フラッシュカードから選ばせたりするなどさまざまな活動を考える。答えは一つではなく、与えられたことばを学習者自身が分析し、どれがほかのものと違うかを考えるような活動にする。そうすることで、形式と意味の関係に対する理解がより深まり、語彙の学習が進み、高度の思考能力も養成することができる。【活動例3】

- 形式と意味の関係に対する学習者の理解が深まってから初めてアウトプットさせる。できるだけ現実に近いコミュニケーションの状況をつくり、コミュニケーションすること自体に目的をもたせて練習させる。例えば、ペア活動として、学習者同士が自分の知識・経験をもとにやりとりし、自由に会話する形で練習させる。答えは一つではない練習をすることが重要である。【活動例4】

- 導入した語彙に関連するトピックをコンテキストにして文法を導入する。現実の場面に近いコンテキストをつくり、文法形式がどのような意味をもっているか、どのような言語機能を果たすかを学習者に理解させるようにする。【活動例5】

- まずインプットをたくさん与え、形式(表現や品詞など)と意味の関係を理解させ、その関係に対する理解を強化し、形式を聞いたり見たりしたときに無意識のうちに意味が思い浮かぶように練習させる。教師は新しい文法・表現を使うが、学習者はそれを聞いているだけ、あるいは見ているだけでよい。【活動例6】

- 単に形式(表現や品詞など)を置き換えるのではなく、活動例7のようにく　　)内のコンテキストを考えながら、形式を変えるような活動が必要。意味に対する注意がなければ、効果的な言語習得は起こらない。どんなに単純な練習でも、意味を考えるようにすることが重要である。【活動例7】

【活動例1: 導入】

イラストを見せながら、趣味に関連する新出語彙を導入する。音声と文字の両方を使って語彙を提示する。

【活動例2: 趣味当て遊び】

教師が問題を読み上げ、生徒はa～dの記号で答える。

1. 山田さんは走るのが好きです。趣味は何だと思いますか。
 2. 金井さんはコンサートによく行きます。趣味は何だと思いますか。
- a. 絵画 b. グルメ c. ジョギング d. 音楽鑑賞

【活動例3: 仲間はずれ探し】

教師は「仲間はずれのことばはどれですか。なぜですか」と聞き、生徒に言わせるカードを取らせる。

1. サッカー、野球、バレーボール、ジョギング、バスケットボール
 2. 書道、茶道、華道、柔道、香道
- ☞ 生徒に、自分に関する語彙をもう一つ足すようにさせると、より高度な思考力が身につく。

【活動例4: 趣味のクラスの紹介】

あなたは町のカルチャー・スポーツセンターのアドバイザーです。次の人たちがアドバイスを求めています。どのようなクラスを勧めますか。自由にアドバイスしてください。

例: 手が器用です。→クラフトのクラスはどうですか。

1. 音楽が大好きです。
2. 字が上手になりたいです。
3. たくさんの人と友だちになりたいです。

【活動例5: 趣味を聞く】

導入した語彙のトピックである趣味について、会話でコンテキストをつくり、形式(動詞の可能形)＝意味(何かができることを表す「れる」「られる」)を導入。

山田: 田中さんの趣味は何ですか。
田中: 趣味ですか。そうですね。水泳かな。
山田: 水泳ですか。どれくらい泳げますか。
田中: 10キロくらい泳げますね。

下線部を変えて練習しなさい。

1. カラオケ、上手に歌う、プロ並みに歌う
2. 料理、どんなものを作る、何でも作る

【活動例6: できる人探し】

教師は1～3について「誰のことですか」と聞き、生徒はa～cの記号で答える。生徒は可能形を聞いているだけ、あるいは見ているだけ。

1. ピザを一度に10枚食べられます。
 2. ヒットをたくさん打てます。
 3. 韓国語が話せます。
- a. イチロー b. 草薙剛 c. ギャル曽根

【活動例7: 何ができますか】

【　　】から選んで、適当な形に変えなさい。
例: <車の修理>が好きな本田さん
壊れた車を_____ (なおす→なおせます)

1. <水泳が得意な田中さん>
3000メートル_____
2. <イタリア料理が得意な森山さん>
パスタをいろいろ_____
3. <お菓子作りが好きな太田さん>
ケーキを上手に_____

【歌う、作る、話す、泳ぐ、食べる】

STEP 4 アウトプット活動②
(ミーニングフル活動)

●STEP 3では、提示された表現から適切なものを選んで活用させる活動だが、次の段階であるSTEP 4では、学習者に自分の知識や経験をもとに考えさせる活動にする。自然な発話として、学習者のレベルに応じて、アウトプットを調節する。【活動例8】

【活動例8：何ができる？】

次のような場所ではどんなことができますか、できることを教えてください。
例：マクドナルド→ハンバーガーが食べられる、コーヒーが飲める
1. ディズニーランド (see Mickey Mouse, ……)
2. 図書館 (read books, ……)
3. 秋葉原 (go to AKB48's concerts, ……)

☞ここでは、生徒が自分の知識、経験をもとにその場所でできることを考える必要がある。自然な発話として、「～たり、～たりできます」「水曜日は～できます」など、生徒のレベルに応じてアウトプットを調節することができる。

STEP 5 アウトプット活動③
(コミュニケーション活動)

●使う文法・表現は限られていても、現実にもありそうな状況で練習する。この場合、教師に言われたことや教科書に書いてあることを繰り返すのではなく、学習者はそれぞれ自分のニーズや能力を考慮して、創造的な自己表現をすることになる。これは、現実のコミュニケーションに近いものである。【活動例9】

【活動例9：求む、手伝い人】

ペアをつくってください。ひとりは仕事をもった家庭の主婦です。来週ニューヨークに出張に行くことになったので、家のことを手伝ってくれる人を雇うことにしました。面接に来た人にどのようなことができるか、いろいろ質問してください(1～4)。相手の答えを聞いて、この人を雇うかどうか決めなさい。
もうひとりは今仕事を探しています。ウェブサイトの求人案内を見て、面接に来ました。相手の1～4の質問に正直に答えてください。
1. 料理する。
2. 犬のめんどうをみる。
3. 子どもの遊び相手になる。
4. <あなたが考えた質問>

●文法・表現を習得し、実際のコミュニケーションができるようにするためには、どの文法・表現に関しても、STEP5まで練習させなければならない。コミュニケーション能力を身につけさせるためには、**実際のコミュニケーションをさせなければならない**のである。

●学習が進んだら、この後に語彙の拡張活動、文法の状況活動、あるいは総合的な活動を行うことにより、実践的なコミュニケーション能力を発達させることができる。

STAGE 5
評価を実施する

テストは成績をつけるためだけではないんだ!

●STAGE 2でつくったテストを実施し、STAGE 1で設定したゴールが達成できたかどうかを測る。なお、学習の過程では、小テストを行ったり、ポートフォリオに成果物を入れたりし、学習状況を診断するとともに、学習を進めるための適切なアドバイスやサポートを行う。テストは成績をつけるだけが目的ではなく、学習者を助け、能力を伸ばすのに使うことが大切なのである。

**教師中心から
学習者中心へ**

コミュニケーション能力を身につけるためには、学習者は教科書に書いてあることを言ったり、教師の言っていることを繰り返したりするだけでは効果は上がらない。現実あるいはそれに近い状況で自分の考えや意思を表現し、コミュニケーションの目的を果たす活動をする必要がある。教師は学習者がすべきコミュニケーション活動を設定し、学習者はその活動の目的を把握し、外国語でそれを達成しようとする

ことで初めてコミュニケーション能力が身につく。

コントロールしていくクラス活動の流れを考える必要がある。
これまでの外国語のクラスでは、教師が活動の中心となり、学習者に知識を与えるタイプの教育がなされてきた。しかし、新しい言語を学ぶということは、知識が単純に教師の頭から学習者の頭に移ることではない。新しい情報が学習者それぞれの頭で解釈され、それぞれの知識体系をつくりあげていくプロセスを意味する。

学習者を中心に据え、多様な学習者に応じて、教師は学習者が自ら学習を進められるように最適条件を整え、知識、能力獲得を助けるサポーターとしての役割を果たすべきであり、教師に頼る学習者ではなく、自分の学習に責任をもち、自ら学習を進めていく学習者をつくっていくことにより、より効果的な外国語学習を推進することができる。

教師はサポーター役

現実のコンテキストのなかで、自然な言語を使って、一連のコミュニケーションを行えるようにするためには、教師中心の活動から徐々に教師のコントロールを弱くし、学習者自身がコ

言語の学びは教師から学習者へ知識を移すことではない!



21世紀に必要な力を伸ばす 外国語教育

言語を使ってコミュニケーションを行うということは社会活動である。外国語を使って社会活動ができるようになるためには、語彙と文法の知識をもっているだけでは十分ではない。また、それを使ってコミュニケーションできるだけでも十分ではない。外国語能力とそれ以外のさまざまな知識、能力を組み合わせ、社会活動ができる能力を身につける必要がある。これまでの外国語教育は言語力を身につけさせることに力を入れてきたが、人間教育の一環として、外国語学習を通して、常に変化する世界に効果的に対応し、社会に貢献できる人を育てることにより、外国語教育はより意義のあるものとなる。そのためには、言語知識、言語運用能力、文化知識、文化理解能力、文化運用能力のみならず、21世紀の社会で成功するための知識やスキル、例えば、新しいものをつくりだす創造力、新しい情報を得てそれを利用する情報のリテラシー、テクノロジーのスキルのほか、協働能力、実際の場面で新しいことを学ぶ能力、柔軟性、環境適応能力、自己決定能力、自己研修能力、交渉能力、自己説明責任能力、リーダーシップ能力などの育成も外国語学習の目標として取り入れていく必要がある。

外国語のクラスはこのような知識、能力、資質を伸ばすためには格好の場である。p.5の語彙の習得活動の例では、趣味に関する語彙を単に丸暗記するのではなく、ある趣味がどのような人にふさわしいかを考えさせたりしている。これにより、分析能力など高度の思考能力を高めることができる。外国語教育はこのような能力を発展させる機会に満ちている。

「学習のめやす」が投じる一石に期待

「学習のめやす」は「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」を理念として開発されているが、実は言語領域、文化領域の知識、能力に加えて、この21世紀の社会で成功するために必要な能力、資質を養成することも視野に入れている。この「学習のめやす」が、日本の中国語、韓国語のクラスで取り入れられ、21世紀に対応できる日本人をつくりだしていくことは、英語に比べて学習者数は少ないとはいえ日本の外国語教育に一石を投じるものである。少子化、高齢化、産業の空洞化など深刻な問題を多く抱える日本ではあるが、この日本を21世紀に対応できる社会にしていくためには、日本人を変えていくことが必要であり、そのためには「教育改革」を実施することが重要である。日本の外国語教育の改革をめざす「学習のめやす」が、小さな一石ではあるが大きな波紋を生み、日本の教育を改革するきっかけになってくれることを強く願う次第である。

pp.3-7の本文は2010年の研修(下コラム参照)で行われた當作主任講師の講義の内容の一部を再構成していただいたものを、本誌掲載にあたってTJFが編集したものです。原文はウェブに掲載していますのであわせてご覧ください。

www.tjf.or.jp/newsletter/backissueslist_jp_120.htm

2010年高等学校韓国語中国語教師研修・外国語担当教員セミナー

■目的 外国語教育の目標設定・内容・方法に関する考え方や理論に対する理解を深め、学習者が総合的コミュニケーション能力を獲得できるようになる授業について考えることをめざす。また、高等学校の韓国語や中国語の実際の授業づくりにも取り組むなど、韓国語・中国語教師の実践的な教授力を養成する。

■実施期間 2010年8月5日(木)～9日(月)
於：桜美林大学 町田キャンパス

■実施機関 主催：TJF
共催：桜美林大学
特別共催：駐日韓国大使館韓国文化院、在日中国大使館教育処、駐日韓国文化院世宗学堂
助成：かめのり財団
後援：文部科学省
協力：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク、高等学校中国語教育研究会

■講師 主任講師：當作靖彦(米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)
韓国語担当講師：金孝卿* (国際交流基金日本語国際センター専任講師)、中川正臣(韓国弘益大学専任講師)、阪堂千津子(東京外国語大学等非常勤講師)
中国語担当講師：植村麻紀子(神田外語大学専任講師)、胡玉華(関西学院大学常勤講師)、山崎直樹*(関西大

学教授)

[敬称略、五十音順、所属は当時 *各言語のリーダー]

■受講者数 89名

対象 ・高校韓国語・中国語教師 外国語担当教員セミナー	対象 ・外国語教師	8/5 (木)	コミュニケーションとは何か/新しい能力を身につけるとは何か/目標設定から活動まで①/学習者中心のクラス活動/Q&A/交流会
		8/6 (金)	目標設定から活動まで②/カリキュラムのバックワードデザイン/形成的評価と総括的評価/学習シナリオ/Q&A
		8/7 (土)	「学習のめやす」がめざすもの/学習シナリオの説明/シナリオの構成要素を考える/まとめ
		8/8 (日)	シナリオにいたるまでのプレ活動を考える/シナリオ作り①
		8/9 (月)	シナリオ作り②/ポスター掲示/ふりかえり



パラダイムシフトを受け止めて

TJFが2009年、2010年に開催した高等学校中国語韓国語教師研修・外国語担当教員セミナーには、延べ192名(うち27名が連続参加)の中国語、韓国語、英語、日本語、フランス語、ドイツ語を担当する、中学、高校、大学等の教師が参加しました。特に2010年度は、高校の中国語・韓国語教育に関心をもつ大学の教師や、韓国語教育を専攻する大学院生の参加が多くありました。

研修は、多くの参加者だけでなく講師にとっても、それま

での自身の教育のあり方を振り返り、教育者として新しい外国語教育にこれからどう向き合い、取り組むべきかを考えるきっかけになりました。

研修で提示された新しい外国語教育の内容や方法に対する参加者の反応は、戸惑いや驚き、共感などさまざまでした。知識中心からコミュニケーション中心へのパラダイムシフトに正面から立ち向かい、新しい外国語教育の第一歩を踏み出そうとしている参加者の声を一部抜粋して紹介します。

新しいアプローチで 広がる可能性

関西大学外国語学部教授
山崎直樹



「フグ調理師試験の採点は簡単だ。受験者に自分のさばいたフグを食べさせれば、即、合否がわかる」というジョークがある。「コミュニケーション能力を育成する教育の成果は、どれだけコミュニケーションができるかで測られるべき」という考え方は、フグを食べさせる評価法に似ている(成果ができごととして見える、学習者自身が成果を実感できる……などの点で)。そして、この考え方は、「can-do能力記述文」というフォーマットとともに、日本の学校教育において広まりつつある。

言語能力を測る基準は「何をどれだけの時間学んだか」ではなく「何がどれくらいできるか」であるという考え方は、なかば必然的に、「何がどれくらいできるか」を決め、そこからすべてを設計していくアプローチへとつながっていく。このアプローチは、すべてをゴールから逆向きに考えていくので、従来の評価方法および授業の設計法を大きく変える可能性がある。例えば、「思いつきでいろいろなことを教え、さあどんな試験をしようかと悩む」「授業では必死に話す練習をしたのに、試験は筆記で文法の問題だった」という教師と学習者双方にとって不幸なできごとがなくなるかもしれない。こう想像することは、とても楽しい。

さらに、このアプローチは、もう一つ大きな可能性をもっている。現在、大学の中国語教育は、中高校で中国語を学んだ学習者や中国語圏に居住して中国語を習得した者を適切に受け入れられる体制になっていない。その原因は、受け入れ側が、多様な言語的背景に由来する言語能力を評価できる基準をもっていないことにある。しかし、このアプローチは、高大連携という枠をも超え、この欠陥を補ってくれるかもしれない。こう想像することは、もっと楽しい。

人間的な成長と交流を 促進するために

培材大学外国語としての韓国語学科専任講師
中川正臣



私は現在、韓国の大学で韓国語の教師教育と留学生を対象とする韓国語教育に携わっています。韓国国内の韓国語教育はこの10年間で急速な発展を遂げ、コミュニケーション中心の教育、なかでも「言語能力」と「文化能力」の重要性が強調されてきました。

しかし、教育現場ではいまだに留学生から「韓国人の友だちがなかなかつくれる」という声をよく耳にします。韓国の大学に在籍しているのに、どうして韓国人の友だちができないのだろうか。私は学習者の交流には、「言語能力」や「文化能力」のような個人の能力だけでは解決できない、何か原因となるものが潜んでいるのではないかと考えるようになりました。

「学習のめやす」はコミュニケーション能力に必要なものとして「言語能力」と「文化能力」に加え、協調性や問題解決能力などを含む「21世紀に求められる能力」を挙げています。アジアにおける人の移動が活発化するなかで、今後はスキルとしての韓国語教育ではなく、学習者の人間的な成長と交流を促進するための韓国語教育、つまり人間主義の韓国語教育の実践が求められているのではないのでしょうか。そのためにも私たち韓国語教師は今、まさに「21世紀に求められる能力」に目を向けるべきだと思います。

「韓国語教育とは、単に韓国語や文化に関する知識を教えたり、韓国語の能力を養成したりすることではない。学習者の人間形成や自己変容、交流の促進を目的とする、もっと人間くさいものである」ということを、第二言語としての韓国語教育にも、この「学習のめやす」が気づかせてくれることを期待しています。

新しいものにふれた驚きと感動

■ 真のコミュニケーション能力を学習者に身につけさせるために、具体的にどのようなアクティビティ(学習活動)を実践すればいいのか、たくさんさんの例を見て、本当に目からうろこが落ちる思いがした。

[日本語教師、海外]

■ 自分ひとりで教えているので考え方が凝り固まってしまう。今回の研修では、今まで実践したこともないような教育方法に驚きと感動の連続だった。すべてを理解したとはまだまだいえないし、ほかにも学びたいことがたくさんある。

[中国語教師、高校]

■ 中国語が使えるようにするには、単語や文法、文化理解、中国人のノンバーバルな行動パターンまで盛り込んで学習者に伝える必要がある。そこまでやって、本物になるのだと思った。

[中国語教師、大学]

学びから実践に

■ 研修に2回参加して、だんだん自分のなかに「学習のめやす」の考え方が入ってくるようになった。「バックワードデザイン」のことを頭において、カリキュラムを考えていきたい。授業を変えるなど、生徒が韓国語学習を通して自信をもてるよう、手助けしていきたい。

[韓国語教師、高校]

■ 前回の研修でとらえ違いをしていた部分を今回の研修で修正でき、学習シナリオや意味のある評価の仕方が意識できるようになった。これまで学んだことをさらに学び直しブラッシュアップしていきたい。

[中国語教師、高校]

■ 昨年に引き続き参加したことで、すべての点においてわかりやすくなっていた。実行してみようという気持ちが強くなった。

[中国語教師、高校]

■ テストのタイミングや内容をきちんと考えてテストを実施することの大切さがわかった。すぐに実践したいと思う。

[中国語／英語教師、高校]

■ バックワードデザイン、学習シナリオなど知ることができた。内省、アクションリサーチができるようになりたいと思った。

[韓国語教師、大学]

学習者の立場で考える

■ 表現と語彙の効果的な習得プロセスを無視していたから、生徒が「難しい、難しい!」といていたのだと気づいた。

[韓国語教師、高校]

■ ふだんの授業では自分自身が学習者であったことを忘れて、生徒の気持ちや学習者の心理をきちんと考えていないことが多い。このような研修を通じて絶えず学習者のことを考える機会をもつことが必要だと考えた。

[英語教師、高校]

■ 政治家がわれわれに対してマニフェストを提示するように、教師も学生に対して、マニフェスト(何をやるのか、何を目標とするのか)を提示すべきで、それに向かって行こうがこの授業であるという契約を学生と交わすこと、その後は、教師と学習者が本当にそれに向かって進んでいるかどうかを互いに明らかにしながら授業を進めることが重要だと感じた。

[中国語教師、大学]

これまでの自分を振り返る

■ 新しい外国語教育のあり方にふれて、これまでの自分の授業のやり方や教材に対する考え方を見直すことができた。

[中国語教師、大学]

■ 自分自身の課題がクリアになった。一単元のフレームワークの一貫性をもう一度見直すことと、全体シラバスの能力記述をすることだと思ふ。

[日本語教師、大学]

仲間からの刺激

■ 校内に中国語の教師はひとりしかいないため、研修で仲間と話すことで刺激を受けた。一緒に授業を受け、アクティビティを実践することで、相互の情報交換や理解が深まった。

[中国語／英語教師、高校]

できることから変えていこう

■ コマ数や生徒の学習能力を考えると、理想の授業を展開することに難しさを感じるが、いつか花開くことを期待してやってみたいと思う。

[英語教師、高校]

■ 英語も韓国語も教えているが、双方とも内容が知識偏重となっている。例えば読解は、書いてあることについて質問するだけで、生徒に考えさせる機会を与えていない。これから生徒が思考能力を伸ばし、考える力も育むことができる外国語教育の実践を心がけたい。また、そのようなニーズに応えられる指導力を身につけたいと思う。

[英語／韓国語教師、高校]

■ 実際の教育現場では生徒のモチベーションなど問題も多いかもしれないが、まずは目の前にいる生徒のことを考え、自分の授業を変えていくことが問題解決につながると思う。

[韓国語教師、高校]

日本での外国語教育という視点

■ 韓国語、中国語、英語等と分けるのではなく「日本での外国語教育・外国語学習」という視点で連携し考えていくことの重要性を感じた。そして、それを高校教師だけでなく、高校全体、大学、地域等に広げていくことが大切だと思った。

[韓国語教育専攻、大学院]

■ アメリカの外国語教育の目的について知ったことで、日本の学習指導要領に述べられている目的・目標の貧しさが明らかになった。どんな外国語教育が必要なのかを改めて議論することが必要だと感じた。

[英語教師、中学]

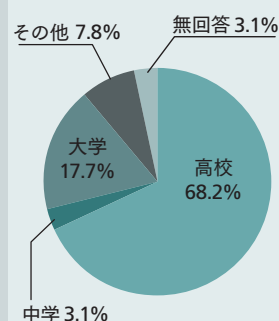
高大の連携

■ 「学習のめやす」の提案は、まさに自分がやりたいと思っていた中国語教育そのものだった。高大連携を考えると、大学の教師もこの考え方を学ぶ必要がある。高大が連携してこれからの中国語教育を変えていきたい。

[中国語教師、大学]

受講者データ [2年間の延べ受講者数=192名]

[所属機関]



[担当教科]

